

新型コロナ時代に生まれつつある 新たな読書のリアリティ

横浜国立大学
石田 喜美

一 はじめに

新型コロナウイルス感染拡大とその影響の長期化は、社会・経済全体に大きな変化をもたらした。「新しい生活習慣」という言葉を持ち出すまでもなく、我々は、今、自分たちがこれまで「当たり前」としてきた生活を見直し、それぞれに、ウイルス感染のリスクとともに生きるための方法を考えることを余儀なくされている。

二 読書生活の変化

このような変化は、当然のことながら、読書生活の変化にも及ぶ。日本出版販売株式会社（日販）が報告した、二〇二〇年一ヶ月の店頭売上前年比調査によれば、「書籍は四ヶ月連続、コミックは一四ヶ月連続で前年を超え、好調を維持」している。ジャンル別に見てみると、書籍の中では特に「ビジネス書」と「児童書」の売り上げが伸びているという（日本財団、二〇二〇年一二月四日付プレスリリースより）。

また、日本財団が二〇二〇年一〇月に発表した「一八歳意識調査」の報告書によれば、調査対象となった一七〜一九歳の男女のうち、約四人に一人がコロナ禍の影響で読書量が「増えた」と回答しているという（日本財団、二〇二〇、「一八歳意識調査 第三〇回―読む・書く―詳細版」）。本報告書では、他の回答とのクロス集計表も掲載されており、それをさらに詳しく見ていくと、コロナ禍のなかで読書量が「減った」と回答している層の特徴を見出すこともできる。もともと

も興味深いのは「本を読む理由」だ。読書量が「増えた」とする層の八割以上が「本が好きだから」と回答しているのに

対し、「変わらない」「減った」と回答する層は全体と比べてもその理由を挙げる割合が低い。一方、「減った」とする層において多くみられる理由は、「学校の教育方針」「受験に役立つ」である。どちらも全体平均に比べて、5%以上高い。この調査結果は、読書生活が二極化しつつあることを示唆している。「本が好き」で自ら本を求め、選ぶことのできる若者たちは、コロナ禍によって与えられた時間によって、読書生活を充実させることができる。一方、学校の課題や受験といった理由以外では本を手にとらない若者たちは、(おそらく受験のための必要性という意味ではそれほど状況が変わらないとしても) 読書量を減少させる。

三 「STAY HOME」の日記 課題

このような読書生活の二極化という事態に対し、国語教育・読書教育はいったい何ができるのか。この問いについて考える上で、米国の公共図書館や学校の動

きはひとつの参考になる。

特に注目したいのは、いくつかの公共図書館がオンライン上に「スカベンジャーハント」の課題を公開し、子どもたちに参加を促したことだ。「スカベンジャーハント」とはいわゆる探しものゲームで、参加者たちは、指示に従って情報やモノなどを集める。たとえば、ドルトン公共図書館のHPでは、今年八月に「仮想スカベンジャーハント」として、近所を歩きまわりながら、リス（一点）や鳥の巣（一点）などを探し、写真を撮影して図書館に送るというゲームの参加者募集が行われた。これに類する課題のひとつとして、ある教師が実施したものを紹介したい。アラバマ教師協会がSNS上で公開していた日記課題だ。

日記（ジャーナル）課題

あなたはいま、歴史家。水曜日（三月一日）から始動します。記録を残し続けるのです。一日一日、ニュースに見られるもの、世界や国、友達、近所の人たち、そして家族、このパンデミックに、どう反応するのかを、詳しく記し続けてください。…（中略）… あなた独自の視点から、未来の人々が危機的

な状況における生活について学ぶために使用する第一次資料を創るのです。

真のものであること、正直であること、そして省察的であること。

課題は、一日あたり最低、手書きで二ページ以上書くこと、日記のスタイルで書くほかに、絵を描いたり、詩で表現したりしても良いとされている。そして、これに続き、次のような「問い」が示される。

1. 今日、政府は何を通告・布告・施行しましたか？
2. あなたの近所では、何が公開されていますか？ 何が非公開ですか？
3. 近所の様子はどんなかんじですか？ 人々は歩き回っていますか？
4. あなた自身や家族、国、世界にとって、今日は昨日とどう違いますか？
5. 今日起きた出来事に、人種主義、偏見、所得の不平等はありましたか？
6. 希望、不安、恐怖を感じさせるものはありますか？
7. 今日家族が必要としたもののうち、持っていないもの、十分でないもの、アクセス獲得できないものは何ですか？

この課題は直接、読書に関わるわけで

はない。しかし、この課題に取り組む中で、さまざまなテキストを読まなければならぬことは確かだ。「あなたはいま、歴史家」であり、記述されるものは、未来の人々の第一次資料となる。だからこそ、「真のものであること」が求められる。ここでは、未来の人々が切迫感ある状況のなかで行うであろう「読むこと」のなかに、学習者の「読むこと」「書くこと」が位置付けられている。新型コロナウイルスとともに生きていかなければならない現在、「読むこと」「書くこと」は、このような新たなリアリティを帯びつつある。

体験型ライブ・アクションRPG普及団体CLOSESは、今秋、図書館を活用したプログラム「BOOK WORLD」(<http://library.close.jp.com>)を提案した。そこでは、地球滅亡後の世界を舞台に、図書館にある知の集積を手がかりとしながら登場人物が未知の状況を理解し、解決していく。このような新たな読書のリアリティを探索していくことが、読書愛好家／不読者の二極化を防ぐ手がかかりとなるのではないか。